

牛窓の「地名の由来」を尋ねて

丸谷憲二

岡山県瀬戸内市に日本のエーゲ海・牛窓と呼ばれる港町があります。牛窓の地名の由来を尋ねて散策したいと思います。



古い町並みを散策していると「牛転」という変わった名前のお店がありました。



瀬戸内市牛窓町関町（旧郵便局跡）電話 0869-34-5072

【営業時間】10:00～17:00 【定休日】木曜日

仙台の牛舌のような牛の部位を使用した名物料理のお店かと思いきや、寄ったところ喫茶店でした。

「牛転」は「ギュウテン又はウシコロガシ」としか読めません。しかし、「牛転」が牛窓の語源だとのこと驚きました。

名前の由来に関連して、二つの伝説があります。

牛転伝説と塵輪鬼伝説です。

その前に「牛窓の古代史」五大古墳を紹介します。

牛窓・五大古墳

牛窓オリーブ園の北側・錦海塩田跡地は、古代には瀬戸内海に突き出した細い半島でした。牛窓は山



が多く、平地は海に面した狭い地域のみです。牛窓に古墳が多い理由は「海上交通路の拠点として栄え、その首長たちの墓」が通説です。

天満宮のある牛窓天神山古墳（85m）・黒島古墳（81m）・鹿歩山古墳（84m）・波歌山古墳跡（60m）・二塚山古墳と大きな五つの古墳が牛窓湾を古墳で護るような形に配列されてい

ます。牛窓天神山古墳は、埴輪の特徴から古墳時代前期、4世紀頃と推定され1番古い古墳です。

天神山古墳

これらの前方後円墳は4世紀から6世紀にかけての、牛窓首長の墓として順番に築かれました。オリーブ園周辺が古墳地帯で、東西2キロ、南北500mの範囲に横穴石室墳が40数基あり【阿弥陀山古墳群】と呼ばれています。時代的には首長墓の最後の二塚古墳と同時期に作られ始め、首長墓が途切れた後も7世紀に連綿と作られていきました。

797年成立の国書『続日本紀』に「牛轉伝説と塵輪鬼伝説」の謎を解くキーワード・新羅が出てきます。

743年 続日本紀 「邑久郡新羅邑久浦」 師楽湾

『続日本紀』は、『日本書紀』に次ぐ勅撰史書です。古代史研究に不可欠の重要史料であり、古代史新発見に必読の書とされています。



『続日本紀』に新羅と牛窓を結ぶ重要な記述があります。

『続日本紀』巻15の天平15年(743)5月28日条に、備前国(きびのみちのくち)言(まう)さく、『邑久郡新羅邑久浦(おほくぐんしらきおほくのうら)に大魚(おほほうを)五十二隻漂着(へうちやく)す。長さ二丈三尺已下一丈二尺

已上なり。皮薄きこと紙の如く、眼(まなこ)は米粒(いひぼ)に似たり。声鹿の鳴くが如(ごと)し。故老皆云はく、「嘗(かつ)て聞かず」といふ」とまうす。』

邑久郡新羅邑久浦とは、現在の師楽湾のことです。師楽と言う地名が残っています。

参考文献 続日本紀ニ 新日本古典文学大系13 岩波書店 1990年発行

牛窓の地名由来説

牛転説以外の地名の由来説を確認しておきましょう。

- ① 宮木謙吉説は、朝鮮語のソシモリ〔ソ(牛)＋モリ(頭)＝ソシモリ(牛頭)]の〔ソ(牛)]に、さらに〔モリ]＝〔始まり、最初と意味を解し“入り江、突入口”と意識しながら、“窓”と深読みすれば牛窓となる。
- ② 井上文夫説は『アイヌ語の「ウシ・マツ・オ」(入り江の多いところ)か「ウ・シ・マ・ツ」(我らの大きな避難する港)が語源ではないか。』
- ③ 岡崎春樹説は『日本書紀に登場する、「日向之諸縣君牛諸」より「牛諸(うしもろ)」が地名発祥の人名である。』日向國の諸縣君の牛諸とは、五宿禰のひとり波多の八代宿禰(孝元系譜)です。

- ④ 刈屋栄昌説は『牛頭山真光寺に関連して室町時代の連歌師・宗祇法師の句、「旅は憂（う）し窓で月見る今宵かな」の「憂し窓」である。』（牛窓夜話前編）
- ⑤ 松本亮説は「大島門（大島は青島の古名）と称すべきをオシマドと称したるに有べき。おしまどのオはウに通音するゆえ後世訛てうしまとと称し字をも転じて牛窓と書くことなりしなるべし。」（東備郡村誌）
- ⑥ 早田玄洞説は『ウシマドは牛島津で、「牛島津」の重なった「シ」の音の一つを省略したものである。』（史上の吉備・大正15年）
- ⑦ 早田玄洞説として「海東諸国記」に『丁亥の年（我朝応仁元年）使を遣して来賀せしむ。書に称す、備前州卯島津代官藤原貞吉と から卯島津其実を得たものである。』（史上の吉備・大正15年）
- ⑧ 紀田順一郎説は『地名学より、ウシは「内」あるいは「潮」、マドは「間処（まど）」で海峡などを示した可能性がある』

刈屋栄昌著・牛窓風土物語には、牛窓の古語として下記を紹介しています。



古語、つまり「字音仮名遣い」です。

「江戸時代までは、発音に意味があり、漢字に意味が出てくるのは明治以降です。」



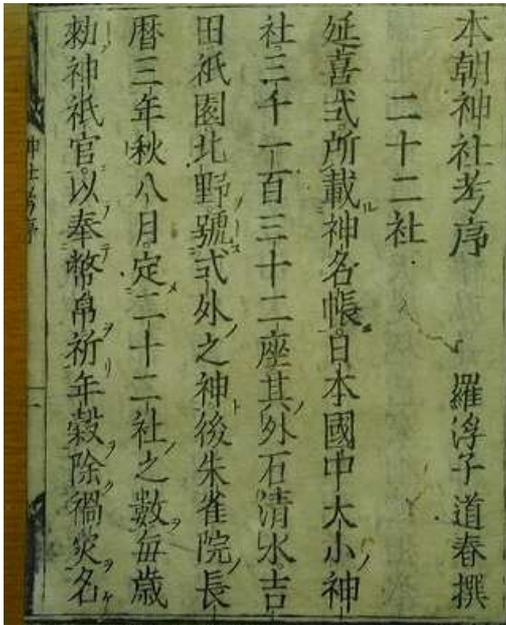
これは、八尋和泉先生（九州歴史資料館・現 別府大学教授）の教示です。上記の中に正解はあるのでしょうか。

風土記と風土記逸文

大和朝廷は713年に「国、郡、郷に良い名前をつけ、その国の産物等を記録し、山川の由来、古い伝承などを記録せよ」との官命を出しました。それに応じて各国で作られたのが「風土記」です。いまでも完全な形で残っているのは「出雲国風土記」だけです。「播磨国」、「豊後国」、「肥前国」、「常陸国」の4カ国の風土記は、完本ではありませんが、一部を失った形で残っています。その他の国の風土記は、原本が散逸してしまい今は残っていません。

偶然に風土記にあった文章が他の本に引用されたりして、風土記の文章が今も残っている場合があります。これを「風土記逸文」といいます。これは、寺社の縁起や由緒などに風土記の文章が原文の形で引用されているものですが、引用元であった原本の風土記の方が無くなってしまったのです。引用の仕方が原文でなく訓読みのものを、「風土記断片」として区分しております。

本朝神社考 下巻・牛窓・林道春



牛窓の最古の記録が収録されているのは、江戸時代初期の「本朝神社考 下巻・牛窓・林道春著」です。近世初期の国文学者、和漢典籍の集書家である今井似閑（1657～1723）により「備前国風土記逸文、つまり713年の記録である。」と認定されました。岡山県立図書館に、[本朝神社考 6巻 羅浮子道春（はやし らざん）撰 出版 上村次郎右衛門 出版年不明]があります。「日本庶民生活史料集成 第26巻 神社縁起 三一書房 1983年」により内容を確認しましょう。

本朝神社考 下巻 備前國・牛窓

「神功皇后の舟、備前の海上を過ぐ。時に大牛有り。出で、舟を覆さむと欲す。住吉明神、老翁と化して、其の角を以て投げ倒す。故に其の処を名づけて牛轉(うしまろはし)といふ。今牛窓(うしまど)といふは訛(よこなまれる)なり。」

「其の牛は蓋(けだ)し塵輪鬼(ちんりんき)の化する所なり。塵輪人の頭有り。嘗(かつ)て黒雲に駕(の)り来りて仲哀帝を侵(おか)す。帝(みかど)之(これ)を射る。身首ニ(ふたつ)と為りて落死す。塵輪も亦(また)帝を射る。帝遂(つい)に崩ず。」

以上の文章が近世初期の国文学者 今井似閑（1657～1723）により二つに分断されました。「備前国風土記逸文」と「塵輪鬼伝説」です。

「住吉の明神」は、いつも老翁姿で現れます。

「風土記逸文」備前國・牛窓（本朝神社考 六巻）

「神功皇后のみ舟、備前の海上を過ぎたまひし時、大きな牛あり、出でてみ舟を覆さむとしき。住吉の明神、老翁(おきな)と化(な)りて、其の角を以ちて投げ倒したまひき。故に其の處を名づけて牛轉(うしまろび)と曰ひき。今、牛窓と云ふは訛(よこなま)れるなり。（今井似閑採択）」

参考文献 荊木美行 著 風土記逸文研究入門 国書刊行会 平成9年

今井似閑が二つに分断した根拠は、2点考えられます。

- ① 二つの伝説が異質であること。
- ② 塵輪鬼伝説は各地に伝承されており、牛窓を発祥地とするには無理があること。



住吉大神御神影

しかし、何故、牛転伝説を「備前国風土記逸文である」と特定したのかの根拠が不明です。それが偽書説の根拠となっています。

1778年(安永7)成立の土肥典膳経平著・寸箴之塵(きびのちり)に「林道春の本朝神社考に見えて、奮事紀・古事記・日本紀ともに此事はなし、春斎の正保犬追物(しょうほういぬおうものがたり)の記に神社考のごとく記て、此事風土記に有やらんと書たるにて考れば、道春の如是書れしも、備前風土記文を其儘にしるせるべし。」とあります。

「正保犬追物語」(しょうほういぬおう)・林信勝著は国文学研究資料館蔵です。確認しておりません。

林春斎(はやし しゅんさい)

江戸前期の幕府の儒官。羅山の三子。名は恕、字は子林、別号は鷲峰・向陽軒・葵軒等。法印に叙せられ、弘文院学士と称した。『寛永系図』『本朝通鑑』を編纂した。延宝8年(1680)歿、63才。

北朝正統説に疑問をいだいた林道春の子供の春斎は北朝正統を明言し『続本朝通鑑』を著しました。また『日本王代一覧』で後醍醐の隠岐還幸はあきらかな重祚であるとして、北朝正統説の根拠としました。この林春斎も、当初は父の影響をうけて南朝正統論者でした。

油原八幡縁起に注目しました。油原八幡は現在の柞原(ゆすはら)八幡宮です。

柞原八幡宮

大分県大分市大字八幡987 097-534-0065

油原八幡縁起 上巻 1685年写

「皇后備前のとまりにつかせ給ふ時。長十丈ばかりなる牛。沖のかたより出来て。のらせ給へる御船をそこなわむとす。其時此老翁彼牛のニの角を取て海中へ投いれつ。しかるに此うし海中にして島となりて今にありとなし。因て此所を牛窓といひて。文字には牛まろばしと書たり。其よりして皇后此翁ただ人にあらず。たのもしき事にをぼしめして。御身ちかくめして何事をも被仰合けり。」最後に「右豊後国油原八幡垂迹之縁起。書者 土佐将監。・・・貞享二年(1685)・・・写」とあります。

内容的には、「備前国風土記逸文」と同一です。本朝神社考 下巻の前文は「備前国風土記逸文」と断定しても良いと考えます。

参考文献 続群書類従第三輯下 神祇部 大正14年 続群書類従完成会発行

柞原(ゆすはら)八幡宮

社伝によると平安時代の初期承和三年(836)の創建、祭神は仲哀天皇、応神天皇、神功皇后の三柱です。鎌倉時代以来大友氏をはじめ歴代府内藩主の信仰が厚く、現在の社殿は安政年間(1854-1860)に造営された八幡造りです。社宝も多く所蔵しており、中でも太刀、薙刀直し刀、銅造佛は国指定重要文化財になっています。また、南大門は別名「日暮門(ひぐらしもん)」と称し二十四孝およびその他のすばらしい彫刻があります。

今井似閑

今井似閑(いまい じかん・1657～1723)は、近世初期の国文学者であり和漢典籍の集書家として著名です。契沖阿闍梨の高弟であり、そのコレクションは京都上賀茂神社・三手文庫と山口県立

図書館の二つに保管されています。国文学者の眼による選択であり良質のものが多くの特徴です。長州藩に出入りしていた京都の商人で、隠居後、近世国文学の先覚者・契沖（1640-1701）に師事し、その著作や蔵書などを書写しました。通称は善四郎、似閑はその号です。似閑がこのような文事を行なえたのは京都代々の両替商大黒屋の富が大いにあずかって力があったからです。彼の集書の半ばが山口県立図書館にあることも大黒屋が長州藩出入の御用達商人であったからです。

神道史の立場から分析を続けましょう。

713年には牛転伝説が成立しており、江戸時代初期に塵輪鬼伝説が成立していたこととなります。

牛窓の塵輪鬼伝説の成立は、他の八幡宮縁起と同様に14世紀と推定されます。

しかし、その内容は他所の塵輪鬼伝説と基本的な違いがあります。それは、新羅（古代朝鮮）を敵国視していないことです。

林羅山が備前国風土記と塵輪鬼伝説を結合して牛窓の項に記述したと考えます。

結合した理由は、神儒一致を主張し神仏一致を否定する林羅山の理当心地神道神学と理解すべきです。

本朝神社考と林羅山

「本朝神社考」の著者、林羅山（林螺山）（1583～1657）は中世以来の神仏混淆を嘆き、古典によって神社本来の姿を明らかにしようとしました。神儒一致を主張して神仏一致を否定した林羅山の理当心地神道（りとうしんちしんとう）は、吉田神道の影響を濃厚に受けています。

江戸初期の儒者。羅山は号、僧号は道春。1595年13歳で洛東山建仁寺の大統庵に入り、古澗慈稽（こかんじけい）に師事、臨済禅の修行をするとともに儒書・漢詩文を学ぶ。1597年15歳で出家することを拒んで家に帰り儒学に専心。1600年18歳で朱子の『四書集註』を読み始め1604年22歳のとき藤原惺窩に師事しました。翌年、二条城で徳川家康に謁見。翌々年、ハビアンと論争して切支丹宗を排撃し、またこの年前後に日蓮宗不受不施派である松永貞徳の信仰を論難しました。1607年25歳で幕府に出仕し剃髪して道春と号します。これ以後、家康・秀忠・家光・家綱の諮問に応じて儒書を進講し、幕府法令や外交文書を起草し、方広寺鐘銘の解釈で豊臣家討伐を正当化し、『寛永諸家系図伝』『本朝編年録』を幕命によって編さんしました。羅山は朱子学を学びながら、初め陽明学の理気一元論の影響を受けていましたが40歳前後から朱子学の理気二元論に従いました。五経に訓点を施し、兵法・老荘・国文学などの広範囲の書物に注釈を行い、中国の白話小説を翻訳し、神儒習合の理当心地神道を唱えるなど幅広い問題に関心をもっていました。

著書 『寛永諸家系図伝』『本朝編年録』『四書集註抄』『性理字義諺解』『儒門思問録』『神道秘伝折中俗解』など。

「大きな牛」は「新羅国からの渡来人」を比喻

「大きな」は技術者集団を比喻

山口県下関市 忌宮神社に伝わる「鬼石」伝承に注目しました。この伝承が牛窓伝承のルーツです。

「朝鮮半島の新羅国の塵輪が熊襲を煽動し」と新羅国と明記しています。大きな牛は「新羅国からの渡来人」を比喻しています。「大きな」は技術者集団の比喻です。

牛転伝説・713年の記録は牛を殺さずに転がただけです。つまり振り伏せただけです。

しかし、1389年になると創作が追加され、牛は転がされ死んでしまい、かつ島となってしまいます。

しかし、何故、その場所が牛窓でなければならなかったのが最大の謎として残ります。

忌宮神社と鬼石伝承



忌宮神社 (いみのみや)



数方庭の由来と鬼石 (6角形の石)

山口県下関市長府宮の内町 1-18 0832-45-1093

仲哀天皇が熊襲討伐のため、七年間にわたり仮の皇居とされた豊浦宮跡といわれ宮に付属して斎宮を建て神祇を祭られたのが忌宮の起こりです。忌宮神社記に、第14代仲哀天皇は九州の熊襲の叛乱を平定のため西下、穴門(長門)豊浦(長府)に仮の皇室を興されたが仲哀天皇7年旧暦の7月7日に朝鮮半島の新羅国の塵輪(じんりん)が熊襲を煽動し豊浦宮に攻め寄せました。皇軍は大いに奮戦しましたが宮内を守護する阿部高廣、助廣の兄弟まで相次いで討ち死にしたので、天皇は大いに憤らせ給い、遂に御自ら弓矢をとって塵輪を見事に射倒されました。敵軍は色を失って退散し皇軍は歓喜のあまり矛をかざし旗を振りながら塵輪の屍のまわりを踊りまわったのが奇祭・数方庭(すほうてい)の起源と伝えられ塵輪の顔が鬼のようであったところからその首を埋めて覆った石を鬼石と呼んでいます。

塵輪と石見神楽

「塵輪」は石見神楽の代表的な33の演目の一つとして伝わる八調子の旧舞です。



仲哀（ちゅうあい）天皇が異国からの侵略者を撃退する話です。4世紀末期、日本では仲哀天皇の時代とされています。新羅国（しらぎのくに）から軍勢とともに黒雲に乗った塵輪が攻め寄せた時、天皇自ら弓で射殺し撃退しましたが、流れ矢に当って崩じたという伝説を題材としています。

この演目は、石見神楽の中では、鍾馗と並んで、鬼舞の代表的なものです。鍾馗の、一神一鬼に対し、二神二鬼の四人舞いの激闘となっており、その立ち会いのすごさが、観る人を楽しませます。

物語は、仲哀天皇の熊襲征伐を題材にしたもので、熊襲を外国の侵略者塵輪に置き換えた内容です。塵輪とは、演目の中に出てくる鬼の名で、国外からの侵入者を仮想したものです。この演目は、「八幡宮縁起」（島根県那賀郡金城町下来原 八幡宮蔵。貝原好古（1664～1700）著）から採ったものと云われています。

「仲哀天皇の御宇に当たりて、新羅国より数万の軍兵せめ来たりて、日本を討ちとらんよす。（中略）この時異国より塵輪という不思議なもの、色はあかく、頭八つありて、かたち鬼神のごとくなるが、黒雲に乗りて日本に来たり、人民を殺すこと数を知らず。（後略）」とあります。舞いの内容は、仲哀天皇（帯中津日子）が従者の高麻呂と共に、塵輪を退治する筋立てとなっています。

（神と介添、二人出て舞う）

神 『自らは人皇第十四代の帝、帯中津日子の天皇とは自らがことなり。今度、異国より数万騎を従え攻め来る中に塵輪と申して、身に翼あり、神通自在に飛び行く大悪鬼、国々村々を駆け巡り、日々に人民を亡ぼすことその数を知らず。々、』

高麻呂『掛けまくも畏き御簾の内に言上仕り候。先だつて仰せつけられ候塵輪、只今黒雲に乗ってこの辺に飛び来たり候ほどに、急ぎ甲冑弓のご用意あつて、何とぞ御退治遊ばされたく候』

（鬼二つ現れ舞う。再び神と介添出て四人で舞う）

鬼 『おお我はこれ、今度日本征伐の大將軍、塵輪とは我が事なり。汝一命を惜しむものならば、早や々々我にこの国を譲り、立ち去るべし。』

（二言三言問答あつて、激闘となり、鬼退治される。）

この演目の鬼は、敏捷性があり、づる賢くて、暴れ廻るが、あっさりと退治されてしまいます。鍾馗に出て来る鬼のような妖気は感じられません。

黒雲に乗って来る塵輪。この者達の悪業三昧。

この伝説は、紀記と内容が異なります。仲哀天皇を祭る下関の忌宮神社や、宇佐八幡宮にも伝承されています。世阿弥作の謡曲「弓八幡（ゆみやわた）」の中でも八幡宮縁起として語られています。

福岡県から兵庫県にかけて瀬戸内海沿いの地域に仲哀天皇を祭った神社が多くみられ、中でも広島県は、大分県とともに特に多いようですが祭神の功績を讃えるため、記紀を基礎にして創作されたものです。応神天皇が第六天の悪魔王を撃退する「八幡」、スサノオが疫神を撃退する「鐘馗」も話の展開は似ています。鎌倉時代に他国から攻められ、これを幸運にも撃退できたことから、国を守る八幡信仰が広がりました。このような背景から、この物語が神楽の演目として取り上げられました。

まとめ

「牛窓に牛窓伝説が無い。」これが私の調査結果です。牛窓伝説を紹介している公的文献は3点です。

- ① 牛窓町史 資料編Ⅱ 考古・古代・中世・近世 平成9年 牛窓町
- ② 改定邑久郡史 上巻 昭和28年 邑久郡史刊行会
- ③ 邑久郡史 第一編 小林久磨雄編 大正6年 私立邑久郡教育会

他に、牛窓の郷土史家・刈屋栄昌氏の著書等があります。しかし、全ての本に共通する重要な欠落部があります。それは、風土記逸文が「今井似閑採択である」と言う事実です。史料を失った中世以前の研究は他所の八幡縁起との比較分析しかありません。

神社の中で、八幡様をお祀りする神社は、全国で14,805社（神社本庁・祭礼データ）、別の資料では4万6百余社です。全国の神社数は、大小合わせると11万社です。八幡社は、おそらく日本で一番多い神様だろうといわれています。これらの八幡神社には、何らかの伝承があるはずですが、その伝承との比較分析です。そのための方法論として牛転伝説・塵輪鬼伝説・島名の命名伝説の叩き台として私見を公開しました。

牛窓神社の岡崎義弘宮司のご指導により、江戸時代の古文書も初公開しております。「エーゲ海牛窓」・タラソセラピーには最適です。しかし、シーズン・オフはホテル・民宿ともながら空きとのことです。全国の八幡神社の宮司様、八幡信仰に興味の有る方はぜひ牛窓・前島へおいでください。そして、直接ご指導いただければ幸いです。掲示板でのご指導お願いします。

牛窓伝説は3つに分割されます。

- ① 牛転伝説 713年以前の成立
- ② 塵輪鬼伝説 現存する最古の八幡大菩薩縁起絵巻は出光美術館蔵の1322年成立です。現物は確認していませんが内容は、「神功皇后の新羅出兵と応神天皇が八幡大菩薩となる話」です。牛窓の塵輪鬼伝説も14世紀の成立と考えます。
- ③ 島名の命名伝説（塵輪鬼が牛窓で死去し色付の島になった。）

牛窓伝説の最大の特徴は、新羅（古代朝鮮）を敵国視していないことです。欠落部が、それを証明しています。

- 1 牛転伝説では、牛を殺さずに搦じ伏せただけです。
- 2 牛窓塵輪鬼伝説では、「塵輪鬼は異国より来た・新羅国」を欠落させています。

- 3 龍神伝説の欠落は、新羅（古代朝鮮）を敵国視していないことの証明です。
- 4 犬神伝説の欠落も、新羅（古代朝鮮）を敵国視していないことの証明です。
- 5 島名の命名伝説では、① 塵輪鬼の色、赤色の欠落 ② 鼠伝説の「青色と白色」の欠落と陰陽五行説を否定しています。

島名の命名伝説については、江戸時代の神社縁起成立に、吉田家や吉田神道の継承者である吉川家が深く関わっていたのは神道史の常識です。

1389年には塵輪島は特定されておらず、前島を塵輪島と特定したのは1703年成立の吉備前鏡です。黒島の初見も1703年、黄島の初見は1803年、青島の初見は1842年です。島名の命名伝説は、1703年～1842年迄に創作された伝説となります。

五香宮縁起の成立が牛窓の塵輪鬼伝説のようです。

1667年～1842年の間に牛窓の島名命名伝説は、牛窓八幡宮社司・井上與左衛門・井上宮内・井上丹後により創作されました。

牛窓の郷土史家・刈屋栄昌氏が収集された膨大な牛窓に関する古記録・古文書が死後散失してしまいました。牛窓図書館・牛窓神社にも史料がありません。牛窓旧事記・物草書置・牛窓伝説・南園紳書・日本郷土物語・吉備雑録・扶桑三韓唱和集等、史料の所在を探しています。

国立国会図書館・岡山県立図書館にもありません。地名・伝説解明に挑戦して行きたいと思います。